大学生の汎用的技能に関する研究(4)

―大学初年次生の汎用的技能と大学生活における意欲の関連性―

向　居　　暁・植　村　広　美・佐　藤　　純

1．問題意識と目的

大学教育における学習成果（ラーニング・アウトカム）が重視され、大学教育の質保証が求められる昨今、大学教育の質的転換が図られている（e.g., 山田, 2018）。大学教育において学生が身につけることを期待される能力の一つに汎用的技能があげられる（詳しくは、植村・向居, 2020参照）。このような背景から、植村・向居（2020）は、溝上（2009）、山田・森（2009）、日潟・森口・小山田・齋藤・城（2009）などのような先行研究を整理し、それらの知見に基づいて汎用的技能尺度の作成を試みた。その結果、汎用的技能は、「社会関係形成・参画力」（社会の中で役割を果たしながら、他者と関係を形成し、社会に参画する態度や能力）、「創造的問題解決力」（社会の中で創造性を発揮しながら問題解決する能力）、「自己主張・リーダーシップ力」（自分自身の意見を伝えながら、集団でリーダーシップを発揮する能力）、「批判的思考力」（物事を多面的に、批判的に考える能力）、「専門知識・知的面での自信」（大学で学習活動を行うために必要な知識）、「母語運用力」（母語を運用する能力）、「外国語運用力」（外国語を運用する能力）、「情報リテラシー」（情報処理機器を利用する能力）の8因子から構成されると結論づけた。また、向居・植村（2020）は、このような汎用的技能は、大学生活における諸活動への意欲、特に、正課内・外にかかわらず勉学に対する意欲により高められることを明らかにした。

一方、汎用的技能が高い学生は、その技能を習得するまでに多くの経験、特に成功体験を積み重ねていると考えられ、自己効力感（self-efficacy）も高いものと推察される。自己調整学習に関する先行研究では、自己効力感が自ら動機づけを高めようとする内的調整方略の使用を促し、最終的に学習の持続性を導くことが明らかにされている（伊藤・神藤, 2003）。自己調整学習（self-regulated learning: e.g., Corno & Mandinach, 1983; Zimmerman & Schunk, 2001）とは、学習者がメタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していることであり、いわゆる「自己教育力」や「自己学習力」といわれる概念に近く、より主体的な学びが求められる大学教育において重要な理論である。また、キャリア教育に関する先行研究では、個々の課題や状況に依存しない一般的な自己効力感が進路選択に正の影響を与えることが明らかにされている（佐藤, 2014）。これは、ある特定の課題に限らず、日常全般にわたって何事も「できる」と自己認知するほど、日常全般にわたり何事にも積極的に粘り強く取り組むことを示唆するものである。以上のように、自己調整学習、および、キャリア教育に関する先行研究から、汎用的技能が高いと自己認知する学生ほど、高い動機づけをもつことが予想される。

これまで、高校生活において努力した事柄と、入学当初の大学生が自覚している汎用的技能（社会人基礎力）との関連性（向居・佐藤, 2012）、また、大学生活において意欲的に取り組んできた事柄と汎用的技能との関連性（向居・植村, 2020）については検討されているが、自己調整学習、あるいは、自己効力感を念頭に置き、現在自覚されている汎用的技能が大学生活における諸活動への

意欲に与える影響を検討した研究は見受けられない。そこで、本研究は、大学初年次生を対象にして、汎用的技能に対する自己認知が、これから始まる大学生活における意欲やキャリア活動への考えにどのように影響するのかについて検討することを目的とした。

2. 調査の概要

2-1. 調査対象者・実施方法

広島県内にある公立大学の2020年度新入生212名に対して、Web調査（Microsoft Formsを利用）への回答の要請を電子メールを用いて行った。そのうち175名（男性47名、女性127名、無回答1名；平均年齢＝18.3歳、*SD*＝1.00、範囲＝18－29歳）が調査に回答した。

2-2. 調査時期

2020年4月中旬から5月末日

2-3. 調査内容

調査内容は、植村・向居（2020）の大学1年生対象の調査を用いて行われた。調査内容は、①高校生活の諸活動における充実感（7項目）、②大学生活の重点（1項目）、③大学生活の諸活動における意欲（13項目）、④キャリア活動（2項目）、植村・向居（2020）の汎用的技能尺度（8因子41項目）であった。また、調査回答の質を向上するために、Web調査での回答開始前に、真面目に回答するという宣誓を回答者に求めた（e.g., 増田・坂上・森井, 2019）。本研究では、③～⑤のデータを利用して分析が行われた。

①高校生活の充実感　「あなたの高校生活はどのくらい充実していましたか」という問いのもと、「高校生活全般」、「学業」、「友人関係」、「高校の教師との関係」、「部活動」、「学校外の活動（趣味の活動、ボランティアなど）」、「アルバイト活動」のそれぞれの項目に対して、“(1)まったく充実していなかった”～“(5)とても充実していた”の5件法で評定を求めた。

②大学生活の重点　「これから始まる大学生活は、以下の8つのうち、どれに近い形で過ごしていきたいですか」という問いのもと、8つの選択肢（実際には「その他」を入れて9つ）を与えた。選択肢は、「勉強第一」、「クラブ･サークル第一」、「趣味第一」、「豊かな人間関係」、「資格取得第一」、「アルバイト・貯金」、「何事もほどほどに」、「何となく」、「その他」（自由記述）であった。

③大学生活の諸活動における意欲　「これからの大学生活において、以下の項目をどのくらい意欲的に取り組んでいきたいと思いますか」という問いのもと、「通常の講義形式の授業に参加する意欲」、「学生が主体的に取り組む演習形式やアクティブ・ラーニングを導入した授業に参加する意欲」、「授業に関係ある勉強に取り組む意欲」、「授業に関係ない勉強に自主的に取り組む意欲」、「資格取得など就職に関係のある勉強に取り組む意欲」、「クラブ・サークル活動をする意欲」、「学内外においてボランティア活動に取り組む意欲」、「就職活動に向けた準備に取り組む意欲」、「家族と交流する意欲」、「友達や恋人と遊ぶ意欲」、「アルバイトをする意欲」、「インターネットやSNSを活用する意欲」、「教員に授業や研究などについて質問したり相談したりする意欲」のそれぞれの項目に対して、“(1)まったくない”～“(4)非常にある”の4件法で評定を求めた。

④キャリア活動　まず、「あなたは大学卒業後に就職したい業種や会社などについて、現段階でど

の程度決めていますか」に対して、“(1)まったく決めていない”～“(4)ほぼ決めている”の4件法で評定を求めた。また、「あなたは就職活動をするにあたって、どのくらい希望の会社や業種から内定をもらう自信がありますか」に対して、“(1)まったく自信がない”～“(5)とても自信がある”の5件法で評定を求めた。

⑤**汎用的技能**　植村・向居（2020）の汎用的技能尺度への回答を求めた。この尺度は、先述したように、「社会的関係形成・参画力」（10項目）、「創造的問題解決力」（4項目）、「自己主張・リーダーシップ力」（5項目）、「批判的思考力」（6項目）、「専門知識・知的面での自信」（4項目）、「母語運用力」（4項目）、「外国語運用力」（4項目）、「情報リテラシー」（4項目）の8因子、計41項目で構成されている。調査対象者には、それぞれの項目に対して“(1)まったく身についていない”～“(5)非常に身についている”の5件法で評定を求めた。

3. 結果と考察

3-1. 入学当初の汎用的技能尺度の各因子と大学生活の諸活動への意欲の関連性

大学入学当初の汎用的技能尺度の各因子の平均値と標準偏差、クロンバックのα係数の値を表1に示した。汎用的技能尺度のすべての因子において高い信頼性が確認された。質問項目では5件法で評定を求めたため、中点の3（“どちらでもない”）を超えると「能力が高い」と判断され、下回ると「能力が低い」と判断されたことを示す。大学入学当初においても、「社会関係形成･参画力」、「母語運用能力」などは高い平均値を示しており、「専門知識・知的面での自信」、「外国語運用力」、「情報リテラシー」の3因子を除くすべての因子でその平均値は中点を超えていた。

表1　入学当初の汎用的技能尺度の平均値（*SD*）と信頼性係数

変数名	平均値	(*SD*)	*Cronbach's α*
社会関係形成・参画力	3.86	(0.66)	.88
創造的問題解決力	3.29	(0.81)	.82
自己主張・リーダーシップ力	3.19	(0.87)	.89
批判的思考力	3.49	(0.68)	.84
専門知識・知的面での自信	2.62	(0.81)	.85
母語運用力	3.78	(0.79)	.87
外国語運用力	2.88	(0.93)	.89
情報リテラシー	2.87	(1.00)	.87

また、入学当初の大学生活の諸活動への意欲とキャリア活動項目の平均値と標準偏差を表2に示した。これらの意欲に関する項目は4件法で評定を求めたため、中点は2.5となる（5件法が使用された「内定をもらう自信」を除く）。大学入学当初の学生の勉学に対する意欲（特に、講義形式の授業への意欲、授業に関係のある勉学意欲、資格・就職関連勉学意欲）や人間関係形成に関する活動への意欲（友達や恋人と遊ぶ意欲やアルバイトをする意欲）が高いことがうかがえる。キャリア活動関連の項目については、入学当初ということもあってか、それぞれ中点と同じくらいか少し低めの平均値となった。

表2　入学当初の大学生活の諸活動への意欲とキャリア活動項目の平均値（*SD*）

項目名	平均値	(*SD*)
大学生活における意欲		
通常の講義形式の授業に参加する意欲	3.52	(0.63)
学生が主体的に取り組む演習形式やアクティブ・ラーニングを導入した授業に参加する意欲	3.25	(0.67)
授業に関係ある勉強に取り組む意欲	3.52	(0.60)
授業に関係ない勉強に自主的に取り組む意欲	2.89	(0.65)
資格取得など就職に関係のある勉強に取り組む意欲	3.63	(0.58)
就職活動に向けた準備に取り組む意欲	3.34	(0.75)
教員に授業や研究などについて質問したり相談したりする意欲	3.18	(0.72)
クラブ・サークル活動に取り組む意欲	3.02	(0.83)
学内外においてボランティア活動に取り組む意欲	2.93	(0.78)
家族と交流する意欲	3.37	(0.68)
友達や恋人と遊ぶ意欲	3.55	(0.65)
アルバイトをする意欲	3.56	(0.58)
インターネットやSNSを活用する意欲	3.41	(0.63)
キャリア活動		
就職したい業種や会社が決まっている	2.47	(0.89)
希望の会社や業種から内定をもらう自信がある（5件法）	2.78	(0.70)

まず、大学入学当初の汎用的技能と大学生活の諸活動への意欲との関連性を検討するために、汎用的技能の各因子と大学生活の諸活動への意欲に関する各項目について相関分析を行った（表3）。以下の相関係数の分析については、$0 \leqq |r| \leqq 0.2$を「ほとんど相関なし」、$0.2 < |r| \leqq 0.4$を「弱い相関あり」、$0.4 < |r| \leqq 0.7$を「比較的強い相関あり」、$0.7 < |r| \leqq 1.0$を「強い相関あり」と記述する（吉田，1998参照）。

その結果、「社会関係形成・参画力」は、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「授業関連勉学意欲」、「資格・就職関連勉学意欲」、「就職活動準備意欲」、「ボランティア活動意欲」、「家族交流意欲」、「友達･恋人と遊ぶ意欲」、「内定の自信」と比較的強い相関が認められ、「講義参加意欲」、「授業無関連勉学意欲」、「教員への質問の意欲」、「クラブ･サークル活動意欲」、「アルバイトへの意欲」、「就職業種決定」と弱い相関が認められた。「創造的問題解決力」は、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「教員への質問の意欲」、「内定の自信」と比較的強い相関が認められ、「授業関連勉学意欲」、「資格･就職関連勉学意欲」、「就職活動準備意欲」、「クラブ･サークル活動意欲」、「ボランティア活動意欲」、「家族交流意欲」、「友達･恋人と遊ぶ意欲」、「アルバイトへの意欲」、「就職業種決定」と弱い相関が認められた。「自己主張・リーダーシップ力」は、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「教員への質問の意欲」、「友達・恋人と遊ぶ意欲」、「内定の自信」と比較的強い相関が認められ、「講義参加意欲」、「授業関連勉学意欲」、「授業無関連勉学意欲」、「資格･就職関連勉学意欲」、「就職活動準備意欲」、「クラブ・サークル活動意欲」、「ボランティア活動意欲」、「家族交流意欲」、「友達･恋人と遊ぶ意欲」、「就職業種決定」と弱い相関が認められた。「批判的思考力」は、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「授業関連勉学意欲」、「授業無関連勉学意欲」、「資格・就職関連勉学意欲」、「就職活動準備意欲」、「家族交流意欲」、「友達・恋人と遊ぶ意欲」、「内定の自信」と弱い相関が認められた。「専門知識・知的面での自信」は、「内定の自信」と比較的強い相関が認められ、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「授業関連勉学意欲」、「資格・就職関連勉学意欲」、「教員への質問の意欲」、「ボランティア活動意欲」、「就職業種決定」と弱い相関が認められた。「母語運

用力」は、「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」、「クラブ・サークル活動意欲」、「インターネット･SNS活用意欲」、「内定の自信」と弱い相関が認められた。「外国語運用力」は、「アクティブ･ラーニングへの参加意欲」、「授業関連勉学意欲」、「就職活動準備意欲」、「ボランティア活動意欲」、「インターネット・SNS活用意欲」、「就職業種決定」、「内定の自信」と弱い相関が認められた。最後に、「情報リテラシー」は、「授業無関連勉学意欲」、「教員への質問の意欲」、「内定の自信」と弱い相関が認められた。

相関分析の結果をまとめると、汎用的技能の中でも、「社会関係形成・参画力」が本研究で取り上げた大学生活における諸活動への意欲に特に強く関連することが多いこと、そして、「創造的問題解決力」や「自己主張・リーダーシップ力」もまた、大学生活における諸活動への意欲に関連することが多いことが明らかになった。

表3　汎用的技能尺度の各因子と大学生活の諸活動への意欲の相関分析結果

	大学生活における意欲													キャリア	
	講義参加	アクティブ・ラーニング	授業関連勉学	授業無関連勉学	資格・就職関連勉学	就職活動準備	教員への質問	クラブ・サークル	ボランティア活動	家族交流	友達・恋人と遊ぶ	アルバイト	インターネット・SNS	就職業種決定	内定の自信
社会関係形成・参画力	**.35****	**.42****	**.43****	**.37****	**.42****	**.40****	**.38****	**.32****	**.44****	**.45****	**.45****	**.26****	.11	**.24****	**.44****
創造的問題解決力	.19*	**.42****	**.26****	**.38****	**.34****	**.37****	**.41****	**.29****	**.35****	**.31****	**.35****	**.29****	.17*	**.36****	**.45****
自己主張・リーダーシップ力	**.22****	**.44****	**.33****	**.33****	**.37****	**.31****	**.40****	**.32****	**.36****	**.32****	**.43****	**.31****	.15*	**.37****	**.52****
批判的思考力	.15	**.27****	**.23****	**.23****	**.20****	**.31****	**.29****	.06	.13	.20**	.23**	.13	.12	.17*	**.35****
専門知識・知的面での自信	.14	**.27****	.14	**.28****	.20**	.19*	**.25****	.13	.22**	.16*	.13	.11	-.01	**.39****	**.41****
母語運用力	.14	**.27****	.15*	.17*	.14	.16*	.14	**.22****	.08	.14	.13	.11	.23**	.13	**.31****
外国語運用力	.15*	**.21****	**.21****	.11	.14	**.22****	.12	.18*	**.21****	.16*	.14	.04	.21**	**.26****	**.32****
情報リテラシー	.14	.19*	.07	**.20****	.16*	.15	**.22****	-.08	.10	.01	.02	.07	.14	.16*	**.24****

$^{**}p<.01$, $^{*}p<.05$

3-2. 大学入学当初に自覚される汎用的技能が大学生活の諸活動への意欲に与える影響

大学入学当初に自覚されている汎用的技能が、これから始まる大学生活の諸活動への意欲にどのような影響するのかを明らかにするために、汎用的技能の各因子を説明変数、各々の大学生活における意欲を目的変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表4）。

まず、「講義参加意欲」については、「社会関係形成･参画力」が正の影響を与えていることがわかった（$R^2=.12$, $F(1, 173)=23.40$, $p<.01$）。「アクティブ・ラーニングへの参加意欲」については、「自己主張・リーダーシップ力」と「社会関係形成・参画力」が正の影響を与えていることがわかった（$R^2=.22$, $F(2, 172)=23.76$, $p<.01$）。「授業関連勉学意欲」（$R^2=.18$, $F(1, 173)=38.97$, $p<.01$）、「授業無関連勉学意欲」（$R^2=.15$, $F(1, 173)=29.52$, $p<.01$）、「資格・就職関連勉学意欲」（$R^2=.17$, $F(1, 173)=36.14$, $p<.01$）、「就職活動準備意欲」（$R^2=.16$, $F(1, 173)=32.02$, $p<.01$）については、いずれも「社会関係形成・参画力」のみが正の影響を与えていることがわかった。「教員への質問の意欲」

は、「創造的問題解決力」および「自己主張・リーダーシップ力」が正の影響を与えていた（R^2=.19, F(2, 172)=19.57, p<.01）。「クラブ・サークル活動意欲」については、「自己主張・リーダーシップ力」と「外国語運用力」が正の影響を与えており、「情報リテラシー」が負の影響を与えていた（R^2=.16, F(3, 171)=11.16, p<.01）。「ボランティア活動意欲」には、「社会関係形成・参画力」と「自己主張・リーダーシップ力」が正の影響を与え、「批判的思考力」が負の影響を与えていた（R^2=.25, F(3, 171)=18.95, p<.01）。「家族交流意欲」については、「社会関係形成・参画力」が正の影響を、「情報リテラシー」が負の影響を与えていた（R^2=.22, F(2, 172)=24.26, p<.01）。「友達・恋人と遊ぶ意欲」については、「社会関係形成・参画力」と「自己主張・リーダーシップ力」が正の影響を与え、「母語運用力」と「情報リテラシー」が負の影響を与えていた（R^2=.27, F(4, 170)=16.06, p<.01）。「アルバイトへの意欲」は、「自己主張・リーダーシップ力」のみが正の影響を与えていた（R^2=.10, F(1, 173)=18.28, p<.01）。最後に、「インターネット・SNS活用意欲」には、「母語運用力」のみが正の影響を与えていた（R^2=.05, F(1, 173)=9.41, p<.01）。また、キャリア活動関連項目を見てみると、「就職業種決定」には、「専門知識・知的面での自信」と「自己主張・リーダーシップ力」が正の影響を、「批判的思考力」が負の影響を与えていた（R^2=.22, F(3, 171)=16.01, p<.01）。「内定への自信」には、「自己主張・リーダーシップ力」と「専門知識・知的面での自信」が正の影響を与えていることがわかった（R^2=.30, F(2, 172)=37.24, p<.01）。

これらの結果をまとめると、授業に参加する意欲（講義形式、アクティブ・ラーニング）、勉強に取り組む意欲（授業関連、無関連、資格関連）、就職活動に向けた準備に取り組む意欲のような正課内・外の勉学に関する意欲に加え、ボランティア活動、家族交流、友達・恋人と遊ぶ意欲のような人間関係形成に関わる意欲ついては、「社会関係形成・参画力」が影響を与えていることが明ら

表4　汎用的技能尺度の各因子と大学生活の諸活動への意欲の重回帰分析結果（ステップワイズ法）

	大学生活における意欲													キャリア	
	講義参加	アクティブ・ラーニング	授業関連勉学	授業無関連勉学	資格・就職関連勉学	就職活動準備	教員への質問	クラブ・サークル	ボランティア活動	家族交流	友達・恋人と遊ぶ	アルバイト	インターネット・SNS	就職業種決定	内定の自信
社会関係形成・参画力	.35**	.22*	.43**	.38**	.42**	.40**	—	—	.49**	.49**	.34**	—	—		—
創造的問題解決力	—	—	—	—	—	—	.24*	—	—	—	—	—	—		
自己主張・リーダーシップ力	—	.28**	—	—	—	—	.23*	.35**	.20*	—	.33**	.31**	—	.33**	.42**
批判的思考力	—	—	—	—	—	—	—	—	-.30**	—	—	—	—	-.23*	—
専門知識・知的面での自信	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	.35**	.20**
母語運用力	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	-.17*	—	.23**		—
外国語運用力	—	—	—	—	—	—	—	.17*	—	—	—	—	—		—
情報リテラシー	—	—	—	—	—	—	—	-.27**	—	-.14*	-.15*	—	—		—
R^2	.12**	.22**	.18**	.15**	.17**	.16**	.19**	.16**	.25**	.22**	.27**	.10**	.05**	.22**	.30**
調整済みR^2	.11**	.21**	.18**	.14**	.17**	.15**	.18**	.15**	.24**	.21**	.26**	.09**	.05**	.21**	.30**

**p<.01, *p<.05（値は標準偏回帰係数（β））

かになった。また、アクティブ・ラーニングや教員に授業などについて質問する意欲、そして、クラブ・サークル活動への意欲、ボランティア活動への意欲、友達・恋人と遊ぶ意欲、アルバイトをする意欲には「自己主張・リーダーシップ力」が影響を与えていた。さらに、この因子はキャリア活動における就職希望職種の決定や内定をもらうことの自信にも影響を与えていた。これらキャリア活動に関わる項目には、「専門知識・知的面での自信」も影響することがわかった。このような汎用的技能の高まりの自己認知は、その能力が有効活用可能であると仮定される大学生活における諸活動への参加を促進する可能性があることが示唆された。また、「情報リテラシー」や「批判的思考力」などの汎用的技能は、いくつかの意欲に負の影響を与えていることが示されたが、多重共線性の影響も考えられることから解釈が難しいものの、少なくともこれらの技能については、「社会関係形成・参画力」や「自己主張・リーダーシップ力」などと比較すると、大学生活における諸活動への意欲に与える影響は小さいと考えられる。

向居・植村（2020）は、大学教育における汎用的技能の育成には、学生が意欲的に勉学に取り組むことが非常に重要であると指摘している。このような意欲が高い学生は様々な体験を通して、汎用的技能を高めると同時に、成功体験から自己効力感を高める。そして、この自己効力感はさらなる活動への意欲を生み出し、再び汎用的技能の向上に影響を与えると仮定される。本研究の結果は、学生が大学生活において意欲的に活動するために、特に、社会の中で役割を果たしながら、他者と関係を形成し、社会に参画する態度や能力である「社会関係形成・参画力」の高まり、そして、自分自身の意見を伝えながら、集団でリーダーシップを発揮する能力である「自己主張・リーダーシップ力」の高まりを自己認知する重要性を示唆するものであるといえるだろう。

4. まとめと今後の課題

大学教育の質保証の観点から、日常生活や社会生活においても必要とされる汎用的技能の育成に注目が集まっている。このような背景から、向居・植村（2020）は、汎用的技能尺度（植村・向居，2020）を用いて、大学生活における諸活動への意欲がどのように汎用的技能に影響するのかについて検討した結果、正課内・外の勉学への意欲が大学生の汎用的技能を高める主要因であることを明らかにした。このような汎用的技能への自己認知は、個人の自己効力感に影響を及ぼすことより、結果的に、大学生活における諸活動に対する意欲にも影響を与えると仮定される。そこで、本研究では、大学初年次生の汎用的技能に対する自己認知が、これから始まる大学生活における意欲やキャリア活動への考え方にどのように影響するのかについて検討された。その結果、正課内・外の勉学に関する意欲には、特に「社会関係形成・参画力」が影響を与えていること、そして、人間関係形成に関わる意欲には、この因子に加え、「自己主張・リーダーシップ力」が影響を与えていることが明らかになった。すなわち、本研究の結果から、学生が自分自身の汎用的技能を自覚することは、その技能が有効活用できる活動への意欲的参加の原動力となることが示唆された。向居・植村（2020）による、正課内・外にかかわらず勉学に対する意欲により汎用的技能が高められるという知見を考慮すると、大学生活における諸活動への意欲と汎用的技能は互いに影響し合う関係性があると考えられる。

本研究の課題として、汎用的技能を測定した時点において自己効力感が測定されていないことがあげられる。今後の調査においては、例えば、学業に関する自己効力感（伊藤・新藤，2003）や人

格特性的自己効力感尺度（三好，2003）などを利用して、学生の自己効力感を測定し、汎用的技能や大学生活における諸活動への意欲との関連を検討することが必要となる。その他、これらの変数に影響を及ぼすと仮定される個人特性についてもあわせて検討されるべきだろう。

本研究、および、向居・植村（2020）では、大学教育の成果（アウトカム）の一指標として汎用的技能が取り上げられ、大学生活の諸活動における意欲との関連性が検討された。向居･植村（2020）において、汎用的技能というアウトカムを高める可能性があることが示唆された大学生活における諸活動への意欲は、学生エンゲージメントという概念に関係すると考えられる。学生エンゲージメントは、山田（2018）によると、「大学生の学習と発達を促すために、彼らの置かれている状況や文脈も考慮しつつ、大学が提供する制度や環境、教職員が日常的に行う教育・指導等における深い関与、学生が自らの意思で選択し、学びに対して主体的に関与するというプロセスや一連の経験、そして大学、教職員、学生それぞれが払う関与の質と量の相互作用やダイナミクスを捉える概念」と定義されている。山田（2018）は、成果（アウトカム）に過度に依存するのではなく、教育・学習の過程（プロセス）を重視する必要性も指摘されてきているとし、我々が本来目を向けるべき対象は、学生の学びへの関与、すなわち、学生エンゲージメントであると主張する。本研究、および、向居･植村（2020）からも示唆されたように、大学生活における諸活動への意欲と汎用的技能は、大学生の実際の活動参加を介して、相互的に影響を与え合う関係であると仮定されるが、どのように関与するのかは未解明である。特に、新入生の大学生活の意欲は、新たに始まる大学生活への期待などから、当初は高まりを見せるが、実際に大学生活が始まると、自覚している能力と現実とのギャップを実感し、活動意欲が低下する可能性も考えられる。引き続き、追跡調査を行うことにより、大学生活における諸活動への意欲や汎用的技能がどのように推移するのか、また、これらがどのようなメカニズムで関連しているのかを明らかにしたうえで、学生エンゲージメントとして学生生活における諸活動への意欲や教職員の教育・指導活動をとらえ、特に関与することが示唆されている勉学に対する意欲の向上を図りながら、アウトカムとしての汎用的技能の育成することが大学教育には求められるのかもしれない。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

付記

本研究の一部は以下で発表された。

向居暁・植村広美・佐藤純（2020）．大学初年次生の汎用的技能と大学生活における意欲の関連性　日本教育工学会2020年秋期全国大会（第37回）講演論文集，291-292.

引用文献

Corno, L., & Mandinach, E.(1983)．The role of cognitive engagement in classroom learning and motivation. *Educational Psychologist*, 18, 88-100.

日潟淳子・森口竜平・小山田祐太・齋藤誠一・城仁士（2009）．正課外活動によって得られる能力尺度の開発　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，2，129-134.

伊藤崇達・神藤貴昭（2003）．自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証―認知的側面と動機づけ的側面の自己調整学習方略に着目して―　日本教育工学会論文誌，27，377-385.

増田真也・坂上貴之・森井真広（2019）．調査回答の質の向上のための方法の比較　心理学研究，90，463-472.

三好昭子（2003）．主観的な感覚としての人格特性的自己効力感尺度（SMSGSE）の開発　発達心理学研究，14，172-179.

溝上慎一（2009）．「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討―正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す―　京都大学高等教育研究，15，107-118.

向居暁・佐藤純（2012）．高校生活と社会人基礎力の関連性　日本教育心理学会第54回総会発表論文集，187.

向居暁・植村広美（2020）．大学生の汎用的技能に関する研究（2）―大学生活の過ごし方と汎用的技能の関連性―　県立広島大学総合教育センター紀要，5，25-38.

佐藤舞（2014）．大学生の就職活動と特性的自己効力の関連　キャリア教育研究，32，39-48.

植村広美・向居暁（2020）．大学生の汎用的技能に関する研究（1）―汎用的技能尺度の作成の試み―　県立広島大学総合教育センター紀要，5，17-24.

山田剛史（2018）．大学教育の質的転換と学生エンゲージメント　名古屋高等教育研究，18，155-176.

山田剛史・森朋子（2010）．学生の視点から据えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割　日本教育工学会論文誌，34，13-21.

吉田寿夫（1998）．本当にわかりやすいすごく大切なことが書いてあるごく初歩の統計の本　近大路書房

Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H.（Eds.）.（2001）. *Self-regulated learning and academic achievement：Theoretical perspectives*. Routledge.